



## 西郷どん（最終章）

英傑たちがキラ星の如く登場する幕末がテーマの NHK 大河ドラマ『西郷どん』も、いよいよ最終章の明治編が始まりました。（ドラマも、無血開城や戊辰戦争などの幕末・明治への改元の時期から、一気に明治 37 年息子の菊次郎が父を回顧する場面にワープさせるなど、番組も最終近しの感がします）日本史を詳しく学ばなかった私は、戊辰戦争の終結後は比較的順調に明治維新は推移したと思っておりましたが、直近の第 40 話の副題も「波乱の新政府」とあるように、多難な時代だったようです。西郷は明治期以降も政府の重鎮として活躍しました。その快拳の一つが 1871（明治 4）年の「廃藩置県」で、明治が始まった段階では、大名領域としての「藩」が国内にまだ残っており、経済（カネ）や軍事力は各藩が握っていたため、天皇を戴く新政府は何としても中央集権を強めるために廃藩置県を断行しようとしていました。政府内にも根強い抵抗や慎重論があったが、西郷は「**全ての責任は自分が持つ**」と言い放ち実現させます。日本の近代化は、実質的にここから始まったと評価されています。やがて、「征韓論」などでの旧友の大久保利通との対立や、長州閥の汚職を次々と摘発したことで、木戸孝允や伊藤博文らとも反目が始まります。そして、結果的には征韓論の政変で敗れた西郷は 600 人もの若者たちと共に鹿児島へと下野することになります。当時、新政府のやり方に不満を抱いていたのは西郷だけではなく、各地で不平士族の蜂起が起こっています。士族に同情的な西郷が担ぎ出された反政府運動は、1877（明治 10 年）の西南戦争として爆発し、西郷は敗れ自害して果てます。西郷が下の人間から支持を受けた大きな理由は、彼自身の名誉欲のなさにあったといわれています。このことは『南洲翁遺訓』の中にも「万人の上に位する者、己れを慎み、品行を正（ただし）くし驕者を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し」としたためられています。ところで、私の母校の小学校歌にも謳われた西郷隆盛の実弟である西郷従道は、西南戦争では兄の反乱軍には組せず（一説には兄隆盛の指示があったといわれます）に新政府に留まりました。その後、政府高官の経歴を重ねながら、陸軍に続き海軍に籍を置き、日清・日露と 2 度の戦争の勝利に貢献、1894 年に海軍大将に任ぜられました。終には、総理大臣候補にも名前が挙がるほどでしたが、兄・隆盛が「逆賊」となってしまったことに責任を感じ、固辞し続けました。晩年は侯爵の位を賜り、海軍軍人初の元帥に任ぜられるなど十分に存在感を発揮したのです。そんな従道が農商務卿だった 1882（明治 15）年 10 月 5 日、長崎学校（当時は小中学校併設）の開校式に来賓として臨席し祝辞を贈ったという。「わが学びやの ひらけはじめに 西郷卿の 臨席ありし」と、今も歌い継がれています。



西郷隆盛



西郷従道

